

資 料

看護基礎教育における看護過程の教育に関する課題  
—成人看護学の看護専門領域に焦点をあてた文献検討—

Issues related to nursing process education in basic nursing  
; A literature review focusing on the specialty area of adult nursing

梶原貴宏, 本谷久美子

Takahiro Kajiwara, Kumiko Motoya

キーワード：看護基礎教育, 看護過程, 成人看護学, 文献検討

Key words : nursing basic education, nursing process, adult nursing, literature review

要 旨

本研究の目的は、成人看護学の看護専門領域に焦点をあて、看護基礎教育における看護過程の教育に関する課題を文献より明らかにすることである。文献は、医学中央雑誌 Web 版、CiNii を用いて「看護過程」「成人看護学」「教育」「教授方法」の検索語句を組み合わせて検索を行った。最終的に 38 件の文献を分析対象とした。対象文献の内容は、【看護過程演習の教育方法の工夫と評価】【看護過程に対する学生の自己評価】【看護過程の構成要素に着目した学習の実態】【看護過程展開における学生の困難】【看護過程の学習支援の工夫】【看護過程教育の現状と課題】の 6 テーマ、16 カテゴリが生成された。学生参加型の演習となるように教育方法を工夫すること、事例の描写および提示方法を工夫すること、看護過程の段階のうちアセスメントに対する学習支援が必要であることが示唆された。

I. はじめに

看護過程は、アセスメント・看護診断（看護問題の明確化）・計画立案・実施・評価の 5 段階で展開されることが多い（日本看護科学学会，2019）。多様な場で多様なニーズをもつ対象に対して、適切にアセスメントし、必要な看護を計画立案し実践するための一連の思考過程である（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会，2020）。「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」（文部科学省，2017）では、臨地実習（以下、実

習）のケアへの参画として看護過程におけるアセスメントが重要であり、適切なケアを提供するための看護過程の基礎的能力を身につけることが学修目標に示されている。学生は看護過程の展開を通して、対象から情報を収集し、対象の特性や状態を科学的根拠に基づきアセスメントし、必要な看護の方向性を見出し、適切な看護ケアを提供することを学修する。

成人看護学では、人の健康の保持増進、急激な健康破綻と回復過程、慢性疾患・不可逆的健康課題、エンドオブライフなどの健康レベルに焦点をあて、疾病や治療

受付日：2021 年 9 月 30 日 受理日：2022 年 2 月 7 日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

により生じる対象の心身の苦痛を予防・緩和するために看護を実践する。また、成人看護学の対象は年齢層が幅広く、家庭や仕事において中心的役割をもち、その生活背景は多様である。そのため対象を自立・自律した存在として捉え、対象のセルフケア能力を看護の視点からアセスメントし、セルフケアの維持・向上を図るための看護が必要である。つまり、成人看護学領域においても看護過程はあらゆる健康レベルにある多様な生活背景をもつ対象に対して、科学的な知識・技術を用いて適切な看護を実践するために必要な学修であるといえる。

しかしながら、学生の多くは学内の演習あるいは実習の看護過程の展開に対して困難を抱えていることが報告されている(岩月ら, 2008; 村上ら, 2006)。学生の看護過程展開に対する困難感を解消し、いかに演習や実習において対象を適切にアセスメントし必要な看護を実践できるように教育していくかが課題である。看護過程に関する先行研究では、各看護専門領域において様々報告がなされている(佐藤ら, 2016; 鈴木ら, 2020; 吉澤, 2018; 若山ら, 2012; 渡部ら, 2013)が、専門領域ごとに看護過程の教育を系統立てて整理した研究はみあたらない。そこで本研究では、成人看護学の看護専門領域に焦点をあて、看護過程の教育に関する課題を文献より明らかにすることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 文献検索期間

2021年7月～8月

### 2. 文献の収集方法

文献は、データベース医学中央雑誌Web版(以下、医中誌)、CiNiiを用いて、「看護過程」and「成人看護学」を固定し、「教育」「教授方法」の検索語句をかけ合わせ、解説・総説および会議録を除き、看護文献に限定して検索した。検索開始年は、文部科学省(以下、文科省)(2002)や厚生労働省(2003)の報告書において看護教育の方向性が多く示され、かつ研究全体を概観することをふまえ、2000年以降の文献を対象とした。また、本研究は看護基礎教育における成人看護学の看護過程の教育を概観することを目的としているため、学士課程のみならず短期大学や専門学校の教育に関する文献も対象とした。

文献の抽出基準は研究目的に照らし、以下の3つすべてを満たすものである。

- ①看護基礎教育に関するもの
- ②看護過程の教育やその効果に関するもの
- ③成人看護学の看護過程に関するもの

### 3. 対象文献の選択

検索の結果、医中誌による検索では618件、CiNiiで57件があった。これらのうち文献の抽出基準①～③を満たさないもの、研究タイトルや抄録・本文によるスクリーニングと重複文献を除いた、合計38件を対象文献とした。

### 4. 分析方法

レビュー・マトリックス方式(Garrard, 2011)を採用した。「著者名・発行年」「研究タイトル」「研究の種類」「研究対象者/研究参加者」「データ収集方法」「分析方法」「研究結果」などの項目を設け、文献を読み進めながらそれらの項目に文献の内容を整理した。「研究結果」は内容の類似性に基づいてカテゴリ化し、抽象度を上げてテーマを生成した。

## III. 倫理的配慮

本研究で使用した文献については出典元を明らかにし、引用する際には内容を変えずに記載するよう留意した。本研究は、開示すべきCOI状態はない。

## IV. 結果

分析対象の38件の文献概要を表1に示した。文献数の年次推移をみると、2005～2009年が14件で最も多く、次いで2010～2014年の10件であった。研究デザイン別の文献数は、質的研究8件、量的研究28件、実践報告2件であった。

分析の結果、成人看護学の看護過程に関する教育は、6テーマ、16カテゴリが生成され(表2)。以下、【 】はテーマ、〈 〉はカテゴリを示す。

### 1. 【看護過程演習の教育方法の工夫と評価】

看護過程の教育方法の工夫と評価に関する文献は10件であった。

#### 1) 〈看護過程演習に参加型学習を取り入れた学生の経験や学習効果〉

片穂野ら(2019)は、看護過程事例と患者シミュレーターを組み合わせたシナリオシミュレーション演習を実施し、学生を対象としたインタビューからその学習方法が有用であったと報告した。また、尾形ら(2017)は、周手術期の看護過程にシミュレーション演習を取り入れ、看護過程の自己評価の総得点と教授方法の評価の総得点には正の有意な相関を認めたことを報告した。手術侵襲から回復過程の事例でロールプレイやディスカッションを取り入れた演習では「ロールプレイングをして、実際に援助してみることで不足している部分が見え

表1 成人看護学領域における看護過程の教育に関する対象文献の概要

タイトル	発行年	著者名	研究の種類	研究対象者/研究参加者	測定尺度、分析/データ収集、分析	結果
看護診断ラベルから見た成人看護学実習の学び・実習目標との関連。群馬医療福祉大学紀要。(1), 9-14.	2012	赤石三佐代, 長嶺めぐみ, 平賀元美	量的研究	看護系大学4年生の実習記録(関連図) n=74	関連図から, 診断名, 年齢, 性別, 看護診断ラベルを抽出	<ul style="list-style-type: none"> <li>・87.8%の学生が「転倒リスク状態」の看護診断を使用し, 次いで「感染リスク状態」が71.6%, 「入浴セルフケア不足」「皮膚統合性リスク状態」が45.9%であった。</li> <li>・領域別にみた看護診断では523の看護診断名が抽出され, 「活動/休息」36.3%, 「安全/防御」34.2%, 「排泄と交換」7.1%, 「栄養」5.7%で, 「セクシャリティー」と「生活原理」の看護診断名は全く使われていなかった。</li> </ul>
紙上患者の病態解釈における学生の思考過程。日本看護学会論文集:看護教育,(37), 440-442.	2006	新井恵子, 西島睦子, 添田啓子	質的研究	A専門学校2年次生 n=12	半構成的面接 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした比較検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病態の解釈における思考過程には, ①機能構造的追求め照らし合わせ病態解釈, ②直感的外的原因追求め照らし合わせ病態解釈, ③当てはめと結びつけ型病態解釈, ④行き当たりばったり型病態解釈, ⑤病気経過順語引用型病態解釈の5つのパターンがあった。</li> </ul>
連想法による成人看護学実習に向けた学習支援プログラム(サマーセミナー)の評価事例による看護過程の展開と看護技術演習の実施。保健学研究, 22(2), 17-25.	2010	橋爪可織, 楠葉洋子, 山口智美, 他4名	量的研究	A大学3年生 n=44	連想法による調査 単純集計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・反応語数が最も多かったのは「深まったこと」, 知識や概念は「難しかったけど, 深まった」, 具体的な活動は「面白かったし, 役に立った」, 学習環境と学習用教材は「やさしくて, 面白かった」, 学習指導法は「面白くて, 深まった」に「役に立った」と回答した。</li> </ul>
成人看護学実習の急性期と慢性期における看護問題の特徴。学生が関わった看護問題の分析。横浜創元短期大学紀要,(8), 99-104.	2012	池田貴子, 長嶋祐子, 西田幸典, 他1名	量的研究	A短期大学で成人看護学実習を行った看護学生3年生 n=72名	学生が立案した看護問題をNANDA-IのNANDA看護診断分類法Ⅱを用いて分類	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人看護学実習において学生が関わった看護問題は, 急性期は「安全/防御」が多く, 慢性期は「活動/休息」が多かった。</li> <li>・「成長/発達」「役割関係」「セクシャリティー」「生活原理」領域の看護問題はなかった。</li> </ul>
成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果。沖縄県立看護大学紀要,(3), 85-93.	2002	石川りみ子, 上間直子, 金城利香, 他7名	量的研究	A大学3年次生 n=72	質問紙調査 記述統計, 平均の差の検定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・演習が実習に「役に立った」と回答した学生は90%, 役に立った割合は20項目で18項目が70%以上, 9項目は80%以上であった。</li> <li>・役に立ったとする得点化の平均値の比較では, 乳がん症例と外傷の症例では低い傾向がみられた。</li> </ul>
看護過程のAセスメント段階における学生の理解度を高める教授法の検討。新潟医療福祉学会誌, 7(1), 10-19.	2007	石塚敏子	量的研究	看護専門学校2年次生で, n=25, n=30, n=31の3年間	質問紙調査 記述統計, Wilcoxon順位と検定, 質的帰納的研究	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10年度と比較して11年度の方が「情報の分析・解釈」「情報の関連性の推理」「看護問題の確認と表現方法」「看護問題の優先度の決定」の4項目で, さらに11年度よりも12年度の方が「意図的・系統的な情報収集」の1項目が有意に高かった。</li> </ul>
成人看護学における看護過程演習の遠隔授業による展開。聖隷クリストファー大学看護学部紀要,(29), 35-43.	2021	乾友紀, 大山末美, 氏原恵子, 他8名	実践報告	看護大学3年次生 n=168	なし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題提出後はLMSへ分析例や解説が提示され, 学生はその内容を自身の分析内容と照らし, 理解を深めていた。教員のフィードバックをもとに課題を修正し, 最終的に課題を提出した。</li> <li>・一部の学生では, 学修形態に十分適応できず, 全体的な理解不足が目立ち, 看護過程の分析に苦慮していた。</li> <li>・科目の授業アンケートでは, 98%の学生が「授業の到達目標を達成した」と回答した。</li> </ul>
臨床実習ではじめて看護過程を展開する学生が体験する困難。成人看護学実習Ⅰの記録に関するアンケート調査を基に。JCHO東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要, 3(1), 33-38.	2017	岩井公佑	量的研究	看護専門学校の学生 n=11	質問紙調査 単純集計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が実習中に感じた困難は, 「11」パターンのアセスメント」が55%と半数を占め, 次いで「日々の看護経過記録」「看護計画」であった。</li> <li>・「11」パターンのアセスメントの困難な内容として, 情報収集の仕方, 収集した情報の整理, 記載方法に関するものが多かった。</li> </ul>
看護過程演習における評価と課題—成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析—。飯田女子短期大学紀要, 第25集, 179-190.	2008	岩月すみ江, 武分祥子, 所澤好美	質的研究	短期大学3年生 n=58	質問紙調査(自由記述) 質的帰納的分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学んだこと」では20のサブカテゴリと8つのカテゴリ, 「困難だったこと」では26のサブカテゴリと11のカテゴリが生成された。</li> </ul>
成人看護学実習前後における「看護過程」の理解の変化。聖隷クリストファー大学看護短期大学紀要,(25), 26-33.	2002	出原弥和, 原田千代子, 落合清子	量的研究	2000年度3年生 n=118および2001年度3年生 n=95	質問紙調査 単純集計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「看護過程の全体像の理解」は他のカテゴリと比べて実習前後とも低値だった。</li> <li>・「看護過程の5つの構成要素の理解」は, 実習後に高値を示した。</li> </ul>
成人看護学でのシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験。講義と実習をつなぐ看護過程演習の取り組み。長崎県立大学看護栄養学部紀要, 18, 47-55.	2019	片穂野邦子, 高比良祥子, 吉田恵理子, 他1名	質的研究	A大学3年次生 n=15	半構造化面接法 質的帰納的分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・臨床実習の前段階として, 看護過程事例と患者シミュレーターを組み合わせたシナリオシミュレーション演習は有用な学習方法であった。</li> </ul>
臨床実習における学生の使用する看護診断—成人看護学および老年看護学実習(急性期)の記録より—。東京厚生年金看護専門学校紀要, 2(1), 16-17.	2000	北川さなえ	量的研究	看護専門学校の2年次生の実習記録 n=37	単純集計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護診断名は全部で17, 延べ267であった。</li> <li>・一人平均6の看護診断を立案し, 立案した看護診断名で多かったのは, 「組織循環の変調」「大腸性便秘」「非効果的気道浄化」「感染のリスク状態」「安楽の変調」などであった。</li> </ul>
成人急性期看護過程演習における学生の学び。術後の侵襲からの回復過程に向かう患者の看護実践。中国四国地区国立病院機構, 国立療養所看護研究学会誌, 15, 95-98.	2019	小林裕子, 藤井光輝	量的研究	A看護学校2年生 n=17	質問紙調査(自由記述) テキストマイニング分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人急性期看護過程演習に手術侵襲から回復過程に向かう事例にロールプレイを取り入れたことは有効な学習であった。</li> <li>・学生は複数の領域が関連していることに難しさを感じていた。</li> </ul>
成人看護学実習での看護過程展開において学生が体験する困難。実習終了後のアンケート調査を基に。日本看護学会論文集:看護教育,(38), 114-116.	2007	三枝香代子, 浅井美千代, 長井栄子, 他3名	質的研究	A看護系短期大学の3年課程の3年生 n=61および2年課程の2年生 n=49	質問紙調査(自由記述) 質的帰納的分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の困難は, 「個別性・具体的な計画と書き方(64%)」「評価・修正の仕方と書き方(78%)」「記録物からの情報収集(44%)」「記録の書き方(67%)」「分類することと関連づけること(50%)」であった。</li> </ul>
看護過程演習における指導方法の検討—思考過程の習得と自分たちで考えることができたという実感—。自治医科大学看護学部紀要,(4), 5-16.	2006	村上礼子, 山本洋子, 水野照美, 他1名	量的研究	2年次生 n=97	質問紙調査 記述統計 自由記述は質的帰納的分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「看護過程演習の内容の理解」および「看護過程演習方法の評価」では約9割の学生が理解でき, 効果的であると回答した。</li> <li>・自由記述では, 良かった点は11カテゴリ, 改善してほしい点は6カテゴリにまとめられ, 「自分たちで考えることができた」と学生たちが実感するできるように指導が必要である。</li> </ul>
看護成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究—「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に—。北海道文教大学研究紀要,(36), 127-136.	2012	中澤洋子, 立石和子, 原谷珠美, 他1名	量的研究	A大学3年次生 n=78	質問紙調査 記述統計, t検定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生は実習前よりも実習後に不安や記録物への負担を感じていた。</li> <li>・看護過程展開では, 「対象の発達段階と発達課題を理解できる」以外の項目が実習後に有意に低下し, 看護計画の立案の4項目すべてにおいて実習後の平均値は3未満と低かった。</li> <li>・コンピテンシーでは獲得能力の上位は「誠実さ, 批判的能力, 言語的コミュニケーション」で, 要求能力の上位は「自分とは異なる考えを理解/受容する力量, リーダーシップ, 書言葉によるコミュニケーション」で, 要求度の平均は実習前よりも実習後で上昇していた。</li> </ul>
看護基礎教育における周手術期の看護過程にシミュレーション演習を取り入れた効果の検討。北海道文教大学研究紀要,(41), 109-118.	2017	尾形裕子, 岩坂信子	量的研究	A大学3年生 n=62	質問紙調査 記述統計, スピアマン順位相関係数	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シミュレーション教育を導入した看護過程の自己評価の総得点と教授方法の評価の総得点は, r=0.753と正の有意な相関を認めた。</li> <li>・教授方法「事例設定」「事例を想定した技術演習」「事例を想定しない技術演習」の学生評価と, 看護過程の要素「アセスメント」「実施・評価」などの項目間に有意な相関を認めた。</li> </ul>
成人慢性期看護過程演習の長期的学習効果。臨床実習後の学生の認識から評価。相生大学紀要,(25), 39-45.	2014	小野千沙子, 佐藤栄子	質的研究	A大学3年次生 n=74	質問紙調査 質的帰納的分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の記載で多かったものは看護過程の展開方法であり, 「慢性疾患やがん患者の特徴」「看護援助の考え方」「グループ学習の効果や重要性」などのカテゴリが抽出された。</li> <li>・実習終了時点での看護過程演習の評価では, 8割強の学生が今後の実習や卒業後に役に立つと回答した。</li> </ul>
看護過程における記録の手引きの学内演習での活用状況について。学内(大学)での学びを実習(臨床)へつなげる教育的試み。ヘルスサイエンス研究, 22(1), 41-47.	2018	大滝潤, 大木友美	量的研究	看護系A大学の学生 n=102	質問紙調査 単純集計, テキストマイニング分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>看護学生の手引きの活用状況では, 全体の91%が「たくさん活用した」あるいは「活用した」と回答した。</li> <li>・単語頻度解析およびネットワークにおいても(活用)という単語が最も多く, ことばネットワークでは(活用)という単語と(内容)(わかる+しやすい)(よい+)という単語に共起関係が見られた。</li> </ul>

表1 成人看護学領域における看護過程の教育に関する対象文献の概要(つづき)

タイトル	発行年	著者名	研究の種類	研究対象者/研究参加者	測定尺度、分析/データ収集、分析	結果
成人看護学概論における看護過程の展開と課題 NANDAの看護診断を用いて、愛知看護看護短期大学紀要、2、69-78。	2006	大屋 演子、小澤 雪絵、竹村美恵、他2名	量的研究	学生 n=84	質問紙調査 記載なし(単純集計)	・看護過程の構成要素5段階は8割以上が理解していた。 ・ヘンダーソンの基本的ニーズの14項目は8割以上、ゴードンの機能的健康パターン構成要素11項目は8割弱が理解していた。 ・アセスメントは主観的・客観的情報は9割以上が理解しているが、情報の解釈と判断および意味づけは6割を満たしていなかった。 ・患者の問題の推論・統合は4割を満たしていなかった。 ・看護診断の診断指標は5割が理解していなかったが、実在型看護診断は7割、共同問題は8割以上が理解し、目標(成果)も8割以上が理解していた。 ・実施のSOAPでは4~5割が理解していなかった。
成人看護学の看護過程展開演習における協働学習とICTを基盤とした学修方法の評価と課題、看護科学研究、(19) 1、31-40。	2021	大山未美、氏原恵子、兼子夏奈子、他3名	量的研究	看護大学3年次生 n=152	質問紙調査 記述統計、内容分析(舟島、2007)を参考にした分析	・ICTを取り入れた主体的な学修の取り組みでは、88.4~98.2%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。 ・ICTの利便性では、「学びの共有(他のチームの考えを理解する)時、ICTを用いることは利便性が高かった」などの全3項目で「非常にそう思う」が90%以上を占めた。
看護基礎教育課程における看護過程教育の課題 各専門看護学領域における看護過程教育の展開方法の分析による一考察、群馬医療福祉大学紀要、(2)、11-38。	2013	櫻井美和、平賀元美、福山なおみ、他9名	質的研究	教員 n=6	質問紙調査(自由記述) 質的データ分析法に基づいた分析	・各専門看護学領域の看護過程教育において適応していた理論は多様であった。 ・看護過程教育における課題として、理論・アセスメントの枠組みの適切性の検討などの5つを導出した。
慢性期患者事例を用いた看護過程演習の効果と課題 複数患者事例導入の試み、桐生大学紀要、(24)、117-125。	2013	佐藤栄子、小野千沙子	量的研究	A大学2年生 n=74	質問紙調査 記述統計、質的帰納的分析	・8割以上の学生が演習は役に立つ、満足と回答した。 ・演習の学びは7のカテゴリー、演習でわからなかったこと・難しかったことは5のカテゴリーがあげられた。 ・学生が抽出した看護問題のうち、教員が設定した診断に合致した割合が50%以上だったのは、半数弱のグループであった。
成人慢性期の事例を用いた看護過程演習の評価(第2報)ー実技演習との関係からみた看護計画記録の分析ー、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、(11)、139-144。	2016	佐藤栄子、小野千沙子	量的研究	A大学の平成24年度2年生 n=74、平成25年度の2年生 n=60	質問紙調査 記述統計、Mann-WhitneyのU検定	・DVD教材演習の有用性に対する学生の評価は、紙上患者演習に比べ有意に高く、満足度も高い傾向にあった。 ・学生は情報量の多いDVD教材演習の方が患者の表情や話し方がわかり患者をイメージしやすく、文字だけの紙上事例演習よりもわかりやすいと評価していた。
成人看護学実習における看護過程教育支援システムの効果、第6回看護情報研究会論文集、105-106。	2005	佐藤和子、藤田君支、高崎光浩、他6名	実践報告	3年次生(人数不明)	質問紙調査 分析記載なし	・リンク機能を用いた支援システムを用いたことにより、「情報収集」「アセスメント」「看護診断」の一連の問題解決的思考の整理が容易となり、一貫性や妥当性のある診断につながった。 ・学生および教員ともに評価が低い傾向にあるのは「実践」であった。
紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第2報)ー実技演習との関係からみた看護計画記録の分析ー、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、(11)、139-144。	2003	澤田和美、豊島由樹子、西堀好恵、他3名	量的研究	A本学3年次生(人数不明)	質問紙調査 記述統計、独立性の検定 自由記述は質的分析	・実技演習後に看護計画立案を行った方が、紙面では表れにくい痛みに対する観察に着目している傾向があり、自由記述でも「実技演習を行ってから看護計画立案を行った方が患者のイメージを思い浮かべやすい」という回答がみられた。
成人看護学看護過程演習の評価 自己評価による学習到達度と授業評価アンケートより、天使大学紀要、11、29-37。	2011	柴田和恵、前田明子、大野和美、他2名	量的研究	A大学3年生 n=81	自己評価表 記述統計、t検定	・演習前にも学習到達度の高かったのは「情報の分類・整理」、低かったのは「関連図作成」「看護問題と共同問題の区別」「顕在と潜在的問題の区別」の順であった。 ・演習後の学習到達度では「情報の分類・整理」が高く、「看護問題と共同問題の区別」が最も低かった。
成人看護学急性期実習における看護診断プロセスの分析、群馬県立医療短期大学紀要、(7)、67-72。	2000	清水裕子、二波玉江	量的研究	短期大学3年生の実習記録 n=76	単純集計	・1症例あたりの看護診断数は、術前1.43、術後4.67で、1症例あたりの共同問題数は術前0.75、術後4.37であった。 ・診断として最も多かったのは「身体運動性の障害」で診断指標・関連因子の数は0~4個であった。
NAND看護診断(分類法Ⅱ)の学習効果ー13領域とその枠組みを用いた実習においてー、日本看護学会論文集看護教育、(37)、9-11。	2006	清水佐智子、緒方重光	量的研究	A大学3年生 n=80	質問紙調査 単純集計・項目分類	・NANDA看護診断(分類法Ⅱ)13領域とその初期情報の枠組みを導入し「情報の分類方法がわかった」は「非常に」「ほぼ」が75%。「情報のアセスメントの仕方がわかった」は「非常に」「ほぼ」で73%であった。 ・自由記述では、「情報の枠組みは書きやすかった」「心理社会面の把握が難しかった」「診断が確立されておらず活用しにくい」などがあった。
記録時間の充足感と看護過程展開状況との関連 実習記録の施設内管理を施行して	2007	清水佐智子、緒方重光	量的研究	A大学学生 n=53	質問紙調査 記述統計、t検定	・記録時間の充足者と未充足者では、看護過程展開状況に差があった。 ・充足者と未充足者間で差があった内容は、アセスメントの段階であり、「データの区別をしていない」「評価の記載において①計画との関連性がない、②翌日へのつながりがない」とであった。
実習記録の管理方法と看護過程展開状況との関連 施設内管理と自宅への持ち帰りにおいて、日本看護学会論文集、看護教育、(39)、97-99。	2008	清水佐智子、緒方重光	量的研究	A大学の平成18~19年度に実習を終了した学生 n=160 記録の管理方法は平成18年度 n=53、平成19年度は自宅持ち帰り n=59	質問紙調査 記述統計、平均の差の検定	・実習記録の施設管理と持ち帰りでは、4項目に差がみられた。 ・施設内管理がすぐれたのは「限られた情報から、さらに必要な情報を得よう試みた」の項目であり、持ち帰りが有意であったのは「13領域のアセスメントから問題点を予測できた」「経過記録の計画は目標が達成できるものをあげた」「経過記録の評価は、計画に関する評価を記載した」の3項目であった。
成人看護学実習(急性期)における関連図活用の学習効果、奈良県立医科大学医学部看護学紀要、2、1-6。	2006	杉崎一美、小河育恵	量的研究	A看護大学3年生および4年生 n=43	質問紙調査 因子分析、信頼性係数	・高得点を示した項目は、「患者の病態が理解しやすい」「看護診断の関連因子が把握しやすい」「患者の全体像が理解しやすい」「関連図の作成に時間がかる」であった。 ・因子分析の結果、「看護過程展開能力」「患者の背景理解」「関連図作成の煩わしさ」「思考能力の向上」の4因子が抽出された。
ゴードンの機能的健康パターンを用いた看護学生のアセスメントの特徴と看護実践への影響、東海大学健康科学部紀要、(9)、75-79。	2003	高橋奈津子、佐藤幹代、長瀬雅子、他3名	質的研究	3年生 n=10	半構造的面接 質的帰納的分析	・自己知覚/自己概念などの心理社会的パターンは、患者との関係性、定義、概念の難しさ、解釈の多様性のため、学生にとって難しいパターンであった。 ・ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントにより、学生は全体的存在として人間理解の視点やデータの意味、ケアの根拠的理解を深めていた。
成人看護学における学生の関連図の学びと傾向の分析、飯田女子短期大学紀要、(26)、75-83。	2009	所澤好美、岩月すみ江、武分祥子、他1名	量的研究	3年次生 n=37	質問紙調査 記述統計、Wilcoxon符号付順位検定	・演習関連図と実習関連図を比較した結果、「治療によって起こる二次的な身身の反応」「疾病や治療、障害に伴う日常生活の変化」「疾病の回復過程に影響を及ぼす療養行動や影響因子」は実習関連図の平均が高く有意差を認めた。
患者参加型の看護過程教育の実践より実践に即したイメージしやすい教育効果を目指して、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要、(2)、1-11。	2005	田中初江、佐藤和子、村田日出子、他2名	量的研究	看護専門学校の1年次生 n=79および2年次生 n=89	質問紙調査 単純集計	・全項目の平均点は、1年次と2年次ともに3.3であった。 ・平均点が高い項目として、「事例に興味・関心が持てたか」「事例はロールプレイすることでイメージがいたるか」は1年次3.7、2年次3.8と高かった。
紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第1報)ー看護過程演習前後における学生の自己評価ー、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、(11)、127-138。	2003	豊島由樹子、澤田和美、西堀好恵、他3名	量的研究	A3年次生で演習前 n=113、演習後 n=111	質問紙調査 記述統計、t検定、質的分析	・演習前後で、16項目中「対象の健康障害の種類と程度について情報の解釈・分析・統合ができる」「対象の社会的側面について情報の解釈・分析・統合ができる」の2項目を除き、演習後の方が有意に評価が高かった。
紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第3報)ー関連図を取り入れた演習における学生の自己評価の変化ー、聖隷クリストファー大学看護学部紀要、(13)、81-90。	2005	豊島由樹子、伊藤ふみ子、萩弓枝、他4名	量的研究	A大学3年次生で演習前 n=115、演習後 n=114	質問紙調査 記述統計、t検定、質的帰納的分析	・関連図の作成をグループで取り組ませたことで、健康障害の解釈・分析・統合で自己評価得点の有意な上昇があった。 ・情報の解釈・分析・統合では演習後であっても学生の2割程度は困難を感じていた。
看護系A大学の学生が認識する成人看護学領域での看護過程演習における困難と指導方法の検討、獨協医科大学看護学部紀要、7、23-37。	2013	内海香子、鈴木純恵、佐藤佳子、他2名	質的研究	看護系A大学2年次生 n=27	質問紙調査 記述統計、質的帰納的分析	・看護過程の各段階の小項目のうち、「一次アセスメント」の困難が最も高かった。 ・一次アセスメント・二次アセスメントにおける困難として、「情報を適切に解釈し、根拠のあるアセスメントができないなどのカテゴリー」が抽出された。

表2 対象文献の内容のカテゴリ化

テーマ	カテゴリ	対象文献
【看護過程の教育方法の工夫と評価】	〈看護過程演習に参加型学習を取り入れた学生の経験や学習効果〉	小林ら(2019), 尾形ら(2017), 田中ら(2005)
	〈実習前の時期に看護過程演習を取り入れたことの学習効果〉	橋爪ら(2010), 岩月ら(2008), 片穂野ら(2019)
	〈事例の提示方法を工夫した看護過程演習の効果〉	佐藤ら(2016), 佐藤ら(2013)
	〈コロナ禍におけるICT技術を活用した看護過程演習の展開と評価〉	乾ら(2021), 大山ら(2021)
【看護過程に対する学生の自己評価】	〈看護過程演習に対する学生の学びの自己評価〉	小野ら(2014), 大屋ら(2006), 柴田ら(2011), 豊島ら(2003)
	〈実習前後の看護過程展開に対する学生の自己評価の比較〉	出原ら(2002), 中澤ら(2012)
【看護過程の構成要素に着目した学習の実態】	〈学生が用いる看護診断・関連因子〉	赤石ら(2012), 北川(2000), 清水ら(2000)
	〈関連図を活用する学習効果〉	杉崎ら(2006), 所澤ら(2009), 豊島ら(2005)
	〈学生のアセスメントの特徴〉	新井ら(2006), 池田ら(2012), 石塚(2007), 高橋ら(2003)
【看護過程展開における学生の困難】	〈実習における学生の看護過程展開の困難〉	岩井(2017), 三枝ら(2007)
	〈看護過程演習における学生の学習上の困難〉	内海ら(2013)
【看護過程の学習支援の工夫】	〈実習の学習効率を高めるための看護診断データベースの導入〉	佐藤ら(2005), 清水ら(2006)
	〈看護過程演習の手引きの活用状況〉	大滝ら(2018)
【看護過程教育の現状と課題】	〈看護過程演習方法に対する学生の評価〉	村上ら(2006), 石川ら(2002), 澤田ら(2003)
	〈看護専門領域間の看護過程教育の実際と課題〉	櫻井ら(2013)
	〈実習における看護過程記録の管理と課題〉	清水ら(2008), 清水ら(2007)

た」という学生の学びがあり(小林ら, 2019), 模擬患者を導入しロールプレイを取り入れた演習では「事例に興味・関心が持てたか」「事例はロールプレイすることでイメージが伝わったか」の項目の評価が高かった(田中ら, 2005).

#### 2) 〈実習前の時期に看護過程演習を取り入れたことの学習効果〉

実習の前に看護過程展開の演習を取り入れたことで、連想から導かれた反応語として「深まったこと」「面白かったこと」「難しかったこと」が多かった(橋爪ら, 2010). また、岩月ら(2008)は実習前の看護過程展開で、「学んだこと」では20のサブカテゴリと8つのカテゴリ、「困難だったこと」では26のサブカテゴリと11のカテゴリを明らかにした.

#### 3) 〈事例の提示方法を工夫した看護過程演習の効果〉

事例の提示方法はDVD教材を用いたDVD教材演習群の方が患者をイメージしやすく、紙上患者演習群よりも評価が有意に高く、学生の満足度も高かった(佐藤ら, 2016). また、複数の事例を提示した演習では、8割以

上の学生が演習は「役に立つ」「満足」と回答した(佐藤ら, 2013).

#### 4) 〈コロナ禍におけるICT技術を活用した看護過程演習の展開と評価〉

ICT (Information and Communication Technology : 情報通信技術) を取り入れた主体的な学修の取り組みについてでは、90%以上の学生が協働学修の学修効果について「非常にそう思う」「そう思う」と回答していた(大山ら, 2021). しかし、乾ら(2021)の研究では、一部の学生は学習形態に十分適応できず、全体的な理解不足が目立ち、看護過程の分析に苦慮していたことが明らかとなっている.

## 2. 【看護過程に対する学生の自己評価】

看護過程に対する学生の自己評価に関する文献は6件であった.

### 1) 〈看護過程演習に対する学生の学びの自己評価〉

小野ら(2014)は、看護過程演習の学生の学びとして「慢性疾患やがん患者の特徴」「看護援助の考え方」「グ

ループ学習の効果や重要性」が多く、実習終了時点で8割の学生が今後の実習や卒業後に役立つと回答したことを報告した。また、柴田ら(2011)は演習前後の学びの到達度について報告し、演習後では「情報の分類・整理」が高く、「看護問題と共同問題の区別」が最も低かったことを明らかにした。同様に、豊島ら(2003)も看護過程の自己評価16項目中14項目で演習後の評価が演習前より有意に高かったことを報告した。また、大屋ら(2006)は看護過程の構成要素の5段階において8割以上の学生が理解し、アセスメントの主観的・客観的情報は9割以上が理解していたものの、情報の解釈と判断および意味づけは6割、実施のSOAPでは4～5割が理解していないことを明らかにした。

## 2) <実習前後の看護過程展開に対する学生の自己評価の比較>

中澤ら(2012)は、実習前よりも実習後に学生は不安や記録物への負担を感じ、コンピテンシーの獲得能力では「誠実さ、批判的能力、言語的コミュニケーション」が上位で、要求能力は「自分とは異なる考えを理解し受容する力量、リーダーシップ、書き言葉によるコミュニケーション」が上位を占め、要求度の平均は実習前よりも実習後に上昇していることを明らかにした。また、「看護過程の全体像の理解」は実習前後で評価が低く、「看護過程の5つの構成要素の理解」の評価は実習後に高値を示した(出原ら, 2002)。

## 3. 【看護過程の構成要素に着目した学習の実態】

看護過程の構成要素に着目した学習の実態に関する文献は10件であった。

### 1) <学生が用いる看護診断・関連因子>

学生の87.8%が「転倒リスク状態」の看護診断を使用し、次いで「感染リスク状態」が71.6%、「入浴セルフケア不足」と「皮膚統合性リスク状態」が45.9%で、「セクシュアリティ」と「生活原理」の看護診断名は全く使われていなかった(赤石ら, 2012)。診断として最も多かったのは「身体可動性の障害」であり(清水ら, 2000)、1人平均で6つの看護診断を立案していた(北川, 2000)。

### 2) <関連図を活用する学習効果>

関連図を活用し高得点を示した質問項目は、「患者の病態が理解しやすい」「看護診断の関連因子が把握しやすい」「患者の全体像が理解しやすい」「関連図作成に時間がかかる」の4項目であった(杉崎ら, 2006)。演習関連図と実習関連図を比較した結果、「治療によって起こる二次的な心身の反応」「疾病や治療、障害に伴う日常生活の変化」「疾病の回復過程に影響を及ぼす療養行動や影響因子」は実習関連図の平均が高く有意差がみられた(所澤ら, 2009)。また関連図の作成をグルー

プで取り組ませたことで、健康障害の解釈・分析・統合では自己評価の得点に有意な上昇があった(豊島ら, 2005)。

### 3) <学生のアセスメントの特徴>

「自己知覚/自己概念」などの心理社会的パターンは、患者との関連性、定義、概念の難しさ、解釈の多様性のため、学生にとって難しいパターンであり、ゴードンの機能的健康パターンを活用したアセスメントにより、学生は全体的存在として人間理解の視点や意味、ケアの根拠の理解を深めていた(高橋ら, 2003)。新井ら(2006)は、病態の解釈における学生の思考過程として、①機能構造的追求型照らし合わせ病態解釈、②直感的外的原因追求型照らし合わせ病態解釈、③当てはめと結びつけ型病態解釈、④行き当たりばったり型病態解釈、⑤病気経過順語引用型病態解釈の5つのパターンを報告した。学生が関わった看護問題は、急性期は「安全/防御」が多く、慢性期は「活動/休息」が多く、「成長/発達」「役割関係」「セクシュアリティ」「生活原理」領域の看護問題はなかった(池田ら, 2012)。また、石塚(2007)は平成10～12年度の学生のアセスメントを比較調査し、10年度との比較では11年度の学生の方が「情報の分析・解釈」「情報の関連性の推理」「看護問題の確認と表現方法」「看護問題の優先度の決定」の4項目で、さらに11年度との比較では12年度の方が「意図的・系統的な情報収集」の1項目が有意に高いことを報告した。

## 4. 【看護過程展開における学生の困難】

看護過程展開における学生の困難に対する文献は3件であった。

### 1) <実習における学生の看護過程展開の困難>

学生の困難は、「個別性、具体的な計画と書き方(64%)」「評価・修正の仕方と書き方(78%)」「記録物からの情報収集(44%)」「記録の書き方(67%)」「分類することと関連づけること(50%)」であった(三枝ら, 2007)。「11パターンのアセスメント」の困難な内容として、情報収集の仕方、収集した情報の整理、記載方法に関するものが多かった(岩井, 2017)。

### 2) <看護過程演習における学生の学習上の困難>

内海ら(2013)は、一次アセスメント・二次アセスメントの困難として、「情報を適切に解釈し、根拠のあるアセスメントができない」などのカテゴリを抽出した。

## 5. 【看護過程の学習支援の工夫】

看護過程の学習支援の工夫に対する文献は3件であった。

### 1) <実習の学習効率を高めるための看護診断データベースの導入>

NANDA 看護診断（分類法Ⅱ）13 領域とその初期情報の枠組みを導入し、「情報の分類方法がわかった」は「非常に」「ほぼ」が 75%、「情報のアセスメントの仕方がわかった」は「非常に」「ほぼ」で 73% であり、一方で、心理社会面の把握が難しいという意見であった（清水ら，2006）。また、リンク機能を用いた支援システムを実習の看護過程展開に用いたことにより、一連の問題解決的思考の整理が容易となり、一貫性や妥当性のある診断につながった（佐藤ら，2005）。

## 2) <看護過程演習の手引きの活用状況>

看護過程演習の手引きの活用状況は、97% が「たくさん活用した」「活用した」と回答した（大滝ら，2018）。

## 6. 【看護過程教育の現状と課題】

看護過程教育の現状と課題に対する文献は 6 件であった。

### 1) <看護過程演習方法に対する学生の評価>

「看護過程演習の内容の理解」および「看護過程演習方法の評価」では約 9 割の学生が理解し、効果的であると回答した（村上ら，2006）。90% の学生が演習は実習に「役立った」と回答していた（石川ら，2002）。また、実技演習後に看護計画立案を行った方が、紙面では表れにくい痛みに対する観察に着目している傾向があり、学生は患者のイメージを思い浮かべやすいと回答した（澤田ら，2003）。

### 2) <看護専門領域間の看護過程教育の実際と課題>

看護過程教育の課題として、理論・アセスメントの枠組みの適切性の検討などが導出されていた（櫻井ら，2013）。

### 3) <実習における看護過程記録の管理と課題>

清水ら（2008）は、実習記録の施設管理と自宅持ち帰り管理を比較検討し、施設内管理は「限られた情報から、さらに必要な情報を得よう試みた」の項目、自宅持ち帰り管理は「13 領域のアセスメントから問題点が予測できた」「経過記録の計画は目標が達成できるものをあげた」「経過記録の評価は、計画に関する評価を記載した」の 3 項目が有意に高いことを報告した。また、記録時間の充足者と未充足者では、看護過程展開状況に差があり、その内容はアセスメントの段階であった（清水ら，2007）。

## V. 考察

成人看護学の看護過程に関する教育の研究結果は、【看護過程演習の教育方法の工夫と評価】【看護過程に対する学生の自己評価】【看護過程の構成要素に着目した

学習の実態】【看護過程展開における学生の困難】【看護過程の学習支援の工夫】【看護過程教育の現状と課題】の 6 テーマに分類された。

【看護過程演習の教育方法の工夫と評価】では、学習効果が高かったものとして、実習前に看護過程演習を取り入れたこと、看護過程の演習を参加型学習としたこと、DVD などの教材を用いて事例を提示したことであった。実習前に看護過程演習を取り入れることで、あらかじめ看護過程をどのように考え展開すればいいのかを理解することができる。そうすることで、実習で実際に患者を受け持った際に、看護過程演習で学習したプロセスに沿って進められ、スムーズに看護過程を展開することができる。学習効果を上げるためには学生が主体となり授業に参画することが必要であると考えられ、片穂野ら（2019）も「患者シミュレーターで観察することで、患者の視覚的イメージ化が促進され、…（中略）…現実的な体験から学習意欲の高まりにもつながっていた」と述べている。また、学生の学習意欲を高めるためには事例の具体性がカギとなり、そのためには患者シミュレーターの導入や DVD などの教材を用いて事例にリアリティをもたせ、いかに患者を具体的に捉えられるように提示するかが重要である。さらにシミュレーション学習の効果として、三輪ら（2021）は「アセスメント力およびフィジカルイグザミネーションのスキル習得が期待できる」としている。以上のことから、実習前から、学生が患者をイメージしやすいような教材を用いて、学生が主体的に学べる環境の構築が看護過程の教育では重要であるといえる。

【看護過程に対する学生の自己評価】では、小野ら（2014）は「実習終了時点で 8 割の学生が今後の実習や卒業後に役立つ」としている。このことは、学生は看護過程の演習が実習や臨床の看護実践において必要であり、患者理解のためには必須であると体験を通じて考えた結果と考える。しかし、看護過程の記録は学生にとって負担であり記録を記載する大変さを知り（中澤ら，2012）、そのことが看護過程に対する学生の不安を大きなものにしていても考えられる。

【看護過程の構成要素に着目した学習の実態】では、学生は「転倒リスク状態」や「感染リスク状態」を多くあげていた。成人看護学では、慢性・長期的な疾病の経過により貧血や低栄養状態をきたしている対象が多く、また、手術をうける対象であれば創の形成やドレーン留置などにより、これらの看護診断が上位を占める結果となったことが推測できる。関連図の活用では、杉崎ら（2006）が「学生にとって関連図の作成は患者理解、看護過程展開に有効であり、クリティカルシンキング能力が養われる」と報告するように、関連図を描くことで患者把握のために必要となる病態の理解や、さらには看護

診断の関連因子などが把握しやすくなるなど、学生自身の思考の整理につながるものと考えられる。

【看護過程展開における学生の困難】では、ゴードンの機能的健康パターンを看護のデータベースに使用した場合、「自己知覚/自己概念」「役割/関係」「セクシュアリティ/生殖」などの心理社会的な側面を捉えることが難しいことが示された。これは成人看護学領域で展開される対象の特徴として、疾病や治療に伴い身体的な苦痛を生じていることが多く、学生は身体的な側面に着目しやすいためであると考えられる。しかしながら成人看護学の対象は家庭や仕事において中心的な役割を果たし、疾病や治療がそれらに影響をもたらすことが考えられ、さらには身体の苦痛や社会的な役割を果たせないことが心理的な側面にも影響をもたらすと考えられる。このことから、身体的側面だけでなく心理社会的な側面も合わせて、学生が対象を全人的に捉えることができるように事例を描く工夫が必要である。

また【看護過程の学習支援の工夫】では、看護過程の各段階のうち、学生はアセスメントを困難と捉えていた。そのため看護のデータベースに基づき収集した情報の整理、あるいはアセスメントの記載例を具体的に提示したり、グループワークを通じて他の学生と考え方を共有したりするなどアセスメントに対する学習支援の工夫が必要であると考えられた。

【看護過程教育の現状と課題】においても、学生は看護過程の演習を「実習に役立つ」「効果的」と評価する一方で、実習中の看護過程の展開状況に差があり、特にアセスメントの段階であることが示されていた。実習の特徴や学生の特性にもよるが、学生の看護過程のアセスメントに対する自己評価に違いがある（清沢ら、2018）ことから、教員は学生によってアセスメント力に個人差があることを認識し、学生の理解度に応じて個別に指導する必要があると考えられた。

## VI. 結論

本研究では、成人看護学の看護専門領域に焦点をあて、看護基礎教育における看護過程の教育に関する文献を概観した結果、その内容は【看護過程演習の教育方法の工夫と評価】【看護過程に対する学生の自己評価】【看護過程の構成要素に着目した学習の実態】【看護過程展開における学生の困難】【看護過程の学習支援の工夫】【看護過程教育の現状と課題】の6テーマに分類された。

看護過程の教育として、教育方法を工夫した学生参加型の演習にすることで、事例は心理社会的側面も捉えられるよう描くとともにリアリティをもたせ提示方法を工夫すること、看護過程の段階のうちアセスメントに対する学習支援が必要であることが示唆された。

## VII. 本研究の限界と課題

本研究では、文献の抽出基準に合致する文献のみの結果であり限られた文献数である。また、サンプルサイズの検討や分析の妥当性について明記されていない文献もあり、対象文献の質を十分に評価していないことも限界である。今後は、本研究から得られた知見を成人看護学領域の看護過程の教育に活用し評価していくことが課題である。

## 文献

- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (2020) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイドライン。  
[https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt\\_igaku-00126\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf), 2021.7.24.
- Garrard J (2011) / 安部陽子 (2012) : 看護研究のための文献レビュー マトリックス方式(第1版), 医学書院, 東京.
- 片穂野邦子, 高比良祥子, 吉田恵理子, 他1名 (2019) : 成人看護学でのシナリオシミュレーション演習における学生の学習経験 講義と実習をつなぐ看護過程演習の取り組み, 長崎県立大学看護栄養学部紀要, **18**, 47-55.
- 清沢京子, 塩澤実香, 佐藤圭子, 他2名 (2018) : 臨床看護援助論IVにおける事例の看護過程演習と臨床看護学実習 I・IIのアセスメントの評価における関連とその現状(その1), 松本短期大学研究紀要, (27), 3-9.
- 三輪晃子, 宗内桂, 服部智子, 他1名 (2021) : 看護学実習における困難事例を用いたシミュレーション学習の効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, **21**, 1-9.
- 文部科学省 (2017) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～。  
[https://www.mext.go.jp/component/a-menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a-menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf), 2021.7.15
- 中澤洋子, 立石和子, 原谷珠美, 他1名 (2012) : 看護成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究 —「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に—, 北海道文教大学研究紀要, (36), 127-136.
- 日本看護科学学会 第13, 14期看護学学術用語検討委員会 (2019) : 看護学学術用語「看護過程」の検討, 65-70.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm). 2021.8.18
- 小野千沙子, 佐藤栄子 (2014) : 成人慢性期看護過程演習の長期的学習効果 臨地実習後の学生の認識から評価, 桐生大学紀要, (25), 39-45.
- 杉崎一美, 小河育恵 (2006) : 成人看護学実習(急性期)に



における関連図活用の学習効果, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, **2**, 1-6.

鈴木由美, 大村倫子, 高橋由美子 (2020) : 母性看護学におけるウェルネス型看護診断による看護過程の教授法, 国際医療福祉大学学会誌, **25** (2), 62-72.

若山志ほみ, 泊 祐子 (2012) : 小児看護アセスメントツールの作成と実施における教育的支援, 日本小児看護学会誌, **21** (3), 52-58.

渡部洋子, 角谷あゆみ, 山崎ちひろ (2013) : 在宅看護学実習に求められる対象理解と学習支援 基盤理論の比較とアセスメントツールの検討, 中京学院大学看護学部紀要, **3** (1), 59-75.

吉澤裕子 (2018) : 精神看護学実習における看護過程モデルの変更に伴う成果 学習の質の向上を目指した実習内容の検討, 旭川大学保健福祉学部研究紀要, **10**, 55-58.